



社会福祉ニュース

2010/10/01

Contents

巻頭言	p.1
特集 佐藤悦子先生追悼記念	p.2
2010 年度活動報告	p.4
新着図書紹介	p.6

† 故佐藤悦子先生追悼記念号 †

≪ 巻頭言 ≫ 佐藤悦子先生を偲んで

所員：木下康仁

すでにご存じのように、社会福祉研究所の元所長、佐藤悦子先生は 2010 年 5 月 10 日、フロリダ州サラソタのご自宅において逝去されました。76 歳でした。

社会福祉研究所の設立は 1967 年でありますから、今年度で 43 年目となります。立教大学には現在でこそ多くの研究所がありますが、社会福祉研究所は早い時期に設立され、以後狭い意味での社会福祉にとらわれることなく、人間福祉の向上を理念に社会科学、人文科学の学際的研究、各種講演会やセミナーの開催、そして、カウンセリングなどの実践活動を行ってきました。

歴史が長くなると、その間には大きな転換点があります。社会福祉研究所にとって最も重要な転換点は 1988 年に佐藤先生が所長に就任された時のように思います。当時から関わっておられる方々のご存知のように、福祉研は社会学部社会学科の早坂先生のご尽力によって設立され、先生のリーダーシップのもとで独自の活動展開をしておりました。佐藤先生は早坂先生の定年退職を受けて所長になられたのですが、それまで社会学部内の研究所という色彩が強かった福祉研を全学的な研究所として位置づけなおすことに指導力を発揮されました。現在の福祉研に至る大きな方向転換がこのときになされたと言っても過言ではありません。

佐藤先生はご自身の専門である心理臨床、とりわけ、対人コミュニケーションの分野において福祉研に集う若い研究者、大学院生を多く育てられ、研究所の相談室の運営を担って下さいました。後年、私が所長のときに相談室の運営が困難になったのですが、福祉研の看板の一つであるこの事業を継続すべく協力して下さったのは佐藤先生でした。いつも第一線での活動を大事にされていました。

去る 7 月 24 日(土)にチャペルでの佐藤先生の記念式と引き続いての偲ぶ会が立教大学で開催されました。大変な暑さの中、社会福祉研究所の関係者の方々を始め、佐藤先生にゆかりのあったたくさんの方々がおいで下さいました。とても暖かみのある集いでした。短い準備期間で開催にこぎつけることができたのは、発起人代表をされた庄司洋子先生と事務局を担当された社会福祉研究所の酒本さんのご尽力によるものであったことも記させていただきます。偲ぶ会ではさまざまな方から佐藤先生の思い出が語られ、その都度新しい佐藤先生の一面が紹介され、各々自分が知っていたのは佐藤先生のごく一部であったことを認識するとともに、先生のお人柄の全体がこの日に初めて実像として共有できたようにも思いました。

佐藤悦子先生のご冥福をお祈りいたします。

《特集 佐藤悦子先生追悼記念》

佐藤悦子先生逝去記念式報告

長年に渡り社会福祉研究所の活動にご尽力いただきました佐藤悦子先生の逝去記念式が 2010 年 7 月 24 日（土）に開催されました。

立教学院諸聖徒礼拝堂において逝去記念式、その後会場を移してセントポールズ会館で偲ぶ会が行われました。逝去記念式には 200 名以上、偲ぶ会には 90 名以上の参加者がありました。

逝去記念式で司式をご担当くださった八木チャプレンは佐藤先生のゼミ生、また、説教をご担当くださった佐藤チャプレン長は佐藤先生と同じ東北出身で「悦ちゃん」と呼ぶ間柄で、佐藤先生の思い出を語ってくださいました。佐藤先生と縁のあるお二人により記念式が執り行われました。

偲ぶ会では、佐藤先生のご経歴の紹介の後、アルバムの映写、そして各方面からご活躍を偲ぶメッセージをいただきました。また、海外からもメッセージをいただき、私たちが知ることのなかった留学時代の佐藤悦子先生の歴史も振り返ることができました。

佐藤悦子先生のご功績のみならず、お人柄を偲んで多くの方がご参加くださいました。皆様のご参加、また心温まるエピソードなどをいただき、無事に記念式を終えることができましたこと、厚く御礼申し上げます。

【世話人】安達映子・逸見敏郎・笠原清志・加藤敏子・木下康仁

近藤 弘・松井明子・柴 良治・庄司洋子・菅沼 隆

なお、記念式・偲ぶ会の事務局を社会福祉研究所がお引き受けし、心をこめて準備いたしました。上記世話人の方々のほか、チャペル事務室の松島理恵さん、長いあいだ公私にわたり佐藤先生のために働かれた井上久美子さんにも大変お世話になりました。

名誉教授 佐藤悦子先生略歴

【略歴】

1934 年 2 月青森県青森市にて誕生。1962 年立教大学文学研究科修士課程（応用心理学専攻）を修了し、コロンビア大学社会福祉研究科（グループワーク専攻）、ブランダイス大学社会学研究科（社会心理学専攻）で学ぶ。その後、ダートマス大学、テキサス大学の講師を経て立教大学社会学部助教授として着任（1986 年より教授）。1999 年に定年により立教大学を退職後、名誉教授に。2000 年に立教女学院短期大学学長に就任（2002 年まで）。

その他、立教大学社会福祉研究所家族相談室、いのちの電話面接室カウンセラーや日本青少年健康センター、米国サラソタ市（フロリダ州）家族療法研究所で臨床家として活動。

専任の職を辞したのちもアメリカと日本を往復しながら活動を続けていた。2010 年 5 月 10 日に米国サラソタ市自宅にて永眠。享年 76 歳。

【主要業績目録】

《単 著》

『家族内コミュニケーション』勁草書房、1987

『夫婦療法 - 二者関係の心理と病理』金剛出版、1999

《翻 訳》

J.ヘイリー『家族療法』川島書店、1985

G.ベイトソン&ロイシュ『コミュニケーション』（共訳：R.ボスバーク）思索社、1989（『精神のコミュニケーション』に改題・新装、新思想社 1995）

C.マダネス『戦略的セラピーの技法 - マダネスのスーパービジョン事例集 -』金剛出版社、2000
（文責：社会福祉研究所事務局 酒本）

佐藤悦子先生を偲んで —感謝をこめて献杯！—

小川憲治（東京工業大学特任教授・客員所員）

5月下旬に、研究所からメールで故佐藤悦子先生のご逝去のお知らせをいただいた日の夜は、突然の訃報に、茫然自失、深い悲しみの中におりました。またあまりにもお早いご逝去が本当に残念でなりません。そんな気持ちの夜、福祉研のメーリングリストを通じ、研究所の心ある先生方と悲しみを共有し、喪に服することが出来たのは、私にとって救いでしたし、幸いでした。その夜のメーリングリストを通じた所員同士のやりとりは、「家族心理学」、「家族内コミュニケーション」がご専門の先生が、「福祉研ファミリー」の長として、われわれ所員の絆を改めて結んでくださったのではと感じております。

その後、7月24日に開催された、「逝去記念式」と「偲ぶ会」に参加させていただき、大変御世話になった先生とお別れすることが出来、またご参加の皆さんと、お元気だった頃の先生を偲ぶことが出来たことは大変有難かったですし、先生のお人柄が偲ばれる、アットホームで、穏やかな「お別れの会」であったとの印象が強く残っております。世話人の労をお取りいただいた皆様に、この場をお借りし、心より感謝申し明けます。

故佐藤悦子先生には、1986年から1991年まで、大学院生時代に、指導教授として、また「臨床社会心理学」専攻の先輩として、厳しくまた温かいご指導いただき、心理臨床の基礎と実践について深く学ばせていただきました。また先生が立教大学社会福祉研究所の所長時代には、研究所助手としてまた客員所員として、研究所の活動（対人関係や家族関係のセミナー（「親子関係の病理」、「家族の生態学」）の企画と実践、紀要やモノグラフ『対人関係としての親子関係』の編集、家庭児童相談研究会活動など）をご一緒させていただき、一方ならぬご厚情とご指導を賜りました。

この20年間、拙い小生が、臨床心理士として、また大学教員として、社会福祉教育、心理臨床活動、社会的活動などを実践してこられたのは、立教大学で先生と出会うことができ、親身にご指導いただいたお蔭様であると痛感しております。この場を借りて改めて、先生の長年のご指導とご尽力に深く感謝申し上げます。そしてありがとうございました。

先生の健康的で、素敵なお顔を忘れることが出来ません。恩師である故佐藤悦子先生のご冥福を心よりお祈りします。

お酒が大好きだった悦子先生に感謝をこめて献杯！



【7月24日に開催されました式典の様子】

《2010 年度 活動報告》

第 1 回家族コミュニケーションセミナーを終えて

河東田誠子（臨床心理士、シニア産業カウンセラー、家族相談士・客員所員）

今年度より、家族福祉相談室のカウンセラーを担当させていただいております河東田誠子と申します。どうぞよろしくお願いたします。

今年度の社会福祉研究所の新事業として、第 1 回家族コミュニケーションセミナー（6 月 24 日、7 月 1 日、8 日）を実施いたしました。

セミナーを通して日頃の家族関係について振りかえる機会をもち、他の人との出会いやワークを通じて、新たなコミュニケーションのあり方について考えることを目的としました。また、3 回の連続セミナーとし、3 回参加を原則として募集しました。短期間の広報ではありましたが、8 名の方たちの参加がありました。

参加者の内訳は、対人援助者（4 名）、教育・研究関係者（2 名）、大学院生（2 名）でした。参加動機は、自分の家族のことを考えてみたい（2 名）、仕事に役立てたい（2 名）、その両方が 4 名でした。

第 1 回のテーマは「日頃の家族関係について振りかえてみましょう」とし、ワークを通じて、非言語的、言語的コミュニケーションについて考えてみました。

具体的には、何通りかの聞き方・聴き方の体験をしていただき、その中で感じたこと、気づいたことを大事にしました。また、2 人組になり、「紙との対話」というテーマのワークも行いました。当日の感想には、日頃あまり意識していない非言語的なやり取りやメッセージの大切さについて考えさせられたとありました。

第 2 回のテーマは「家族関係を見直してみましよう一家族イメージ法（FIT）を用いて」とし、FIT の作成を通じて自分の家族関係について考えてみました。FIT は、自分の家族に対する思いやイメージ、いわば“自家像”を表現するものです。どの参加者も FIT に接したのは初めてでしたが、とても積極的に取り組んでいただきました。また家に持ち帰って、パートナーである“旦那さま”にやってきてくださった方もありました。

第 3 回のテーマは「これからの家族関係を考えていきましょう」とし、ある模擬家族のロールプレイを通じて家族関係のあり方を考えてみました。また、家族の協働活動を通じて家族関係が変化することを体験していただきました。ロールプレイが初めての方、慣れていらっしゃる方とさまざまでしたが、“ある家族のあり様”を感じながら取り組んでいただきました。家族の協働体験では“天使の粘土”を用いました。触り心地や感触のよい粘土ですので、楽しみながら家族の傑作！を作っていたいただいたように思います。

セミナー終了後に寄せられた感想をまとめてみますと、次のようなことがわかりました。①対人援助職の方たちの需要が多い。②家族関係におけるコミュニケーションについて、主にワークを通じて体験し学んでいただいた。セミナーでの学びを仕事に活かしたいとのことだったが、まずは自分の家族理解、家族関係について振りかえることが必要だと思われた。③ほとんどの方が、セミナーの設定時間や回数は「ちょうどよい」と回答していた。家族療法などの学習経験の有無に関わらず、皆さんにとっても積極的に熱心に参加していただいたように思います。継続セミナーの要望も出されておりますので、今後検討していきたいと思っております。

第 2 回家族コミュニケーションセミナーは、10 月 14 日（木）、10 月 28 日（木）、11 月 11 日（木）いずれも 18:00～20:30 に開催する予定でおります。関心のある方は、是非お申込みください！

社会福祉研究所 2010 年度第 1 回研究例会

労働と身体をめぐる一考察 『働く女性とマタニティ・ハラスメント』を中心に

報告者 : 杉浦浩美 (立教大学他兼任講師・研究員)
コメント : 佐川佳南枝 (立教大学院社会学研究科・研究員)
三具淳子 (立教大学他兼任講師・研究員)
菅野摂子 (立教大学他兼任講師・研究員)
深田耕一郎 (立教大学院社会学研究科・研究員)

2010年度第1回研究例会は5月18日に開かれ、「労働と身体をめぐる一考察 『働く女性とマタニティ・ハラスメント』を中心に」と題して、杉浦浩美さんの著書『働く女性とマタニティ・ハラスメント』の合評会が催されました。同書は、杉浦さんが2008年3月に立教大学に提出された博士論文をもとに加筆修正し、2009年9月に大月書店より出版されています。

同書は、これまでの研究においてテーマ化されてこなかった働く女性の妊娠に着目し、関係する学問領域（女性労働研究、フェミニズム、ジェンダー研究）の知見を踏まえ、たうえで、「平等化戦略における差異の主張＝『女性の身体性の主張』はどこまで可能なのか」という問題を設定しています。

これを追求するために採用された方法は、当事者としての経験をもつ女性労働者へのインタビュー調査ですが、とくに女性の状況を変えることに貢献することを目的とするフェミニスト・リサーチと位置づけられています。

男女平等化戦略を有利に進めるためには、男女の差異を最小化する方向がとられてきました。しかしそれでは、産む身体を使うか否かは自己の選択・責任に帰着することになるのですが、これに対し同書は、「産む身体」の主張を困難にし、結果として、母子の健康に重大な危険を招く可能性があるとして警鐘を鳴らし、当然の権利としての母性保護の必要性を指摘しています。

副題に『「労働する身体」と「産む身体」を生きる』とあります。女性労働者の妊娠という経験が、実は、「労働する身体」と「産む身体」との矛盾のなかにあるという本研究の発見は、女性の就業継続に伴って起こりうる困難の重要な局面を明らかにしただけでなく、労働者として妊娠期を過ごす女性たちの、過酷な現状と問題点を可視化させ、それにより現状改善への重要な手がかりを示したといえるのではないかと思います。

合評会では、はじめに、杉浦さんから問題意識をもつに至った経緯、論文執筆過程で得たアドバイスや指摘、それに対する考察なども含めながら、著書の内容について報告がありました。その後、佐川佳南枝研究員、菅野摂子研究員、深田耕一郎研究員、三具淳子研究員からコメントが述べられ、それを受けて杉浦さんからリプライがなされました。

杉浦さんご自身からこれまでの書評等での評価や指摘も紹介され、読者の立場によって異なる様々なコメントも大変興味深く思われました。また、「マタニティ・ハラスメント」というネーミングによって、見えなかった問題が見えるようになった効果は非常に大きく、今後の展開に注目していきたいと思いました。

(文責：三具淳子)

《新着図書紹介》

『「患者中心の医療」という言説—患者の「知」の社会学』

(2010 年、立教大学出版会)

松繁 卓哉 (国立保健医療科学院・研究員)

「患者中心の医療」というフレーズは、医療のあり方について議論される時に頻繁に登場します。しかしながら、これらの議論を注意深く見ていくと、このフレーズには一定の曖昧さが残されていることに気がつきます。すなわち、「患者が医療の中心にいる、とは具体的にはどのようなことなのか」「患者中心の医療を実現するために、誰が、何をすべきなのか」という点について、各人の見解に非常に大きな幅が存在しています。

医学的見地から「最良」と考えられる選択肢について、患者が理解しやすいように丁寧に説明して、治療を行っていくことを「患者中心の医療」と考える向きがある一方で、医療者と患者を対等な立場として位置づけ、双方が協議して治療方針を決定していくことを「患者中心の医療」と捉える見解も存在します。

見解に幅があること自体は、むしろ自然なことなのかもしれません。一つの概念に対する解釈が、社会において統一されていることのほうが、むしろ稀であると言えるでしょう。ここにおいて「ある概念について、誰が、何を語り、どのような動向を生み出しているのか」という社会的な問いが意味を持つてくるわけです。本書は、まさにこのような問いを「患者中心の医療」というフレーズに対して投げかけるものとして書かれています。

本書では「患者中心の医療」に関わる多くの人々のうち、患者と医療者をキープレイヤーとして捉えています。ただし、今日に至るまでの「患者中心の医療」の実現に向けての取り組みにおいて「患者の不在」があることを指摘しなければなりません。医療者、行政官、研究者などが「患者中心の医療」のために多大な労力を注いできたことは間違いのないことですが、そうした取り組みに患者自身が関与する機会は、まだまだ限られているのが現状ではないでしょうか。

こうした状況をふまえて、本書は、患者・医療者のそれぞれが展開してきた「患者中心の医療」のための取り組みに着目する実証研究です。かたや、患者自らが自律性を身につけて、自身の身体をマネジメントしていこうとする「セルフマネジメント」へ注目し、他方で、患者の意を適切に汲み取る臨床能力の育成を目指す医学教育改革に目を向けています。これら双方の取り組みをめぐって、「患者中心の医療」という言説が形成されるダイナミズムを、本書は批判的言説分析 (critical discourse analysis) の接近法により読み解いていきます。読み進んでいただければ分かるように、この作業は「知」というものの成り立ちについて考察することを余儀なくさせるものでした。

この研究の成果を公表する機会を与えていただいた立教大学出版会の関係諸氏に、この場をお借りして感謝申し上げます。

発行：立教大学社会福祉研究所

〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

Tel : 03-3985-2663

Fax : 03-3985-0279

e-mail : r-fukushi@grp.rikkyo.ne.jp

URL : <http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ISW/>